

あなたが関心を持つ“グローバルな社会課題”は？

その解決に向けて、どんなアクションを起こしますか？

【基本情報】

氏名：亀山杏佳

所属：筑波大学人文・文化学群日本語・日本文化学類 2 年

専門：日本語教育

出身：静岡県焼津市 外国人労働者/外国人児童が多い地域で過ごしました



【これまでの経歴】

高校生のときから、技能実習生への渡日前・渡日後の日本語教育に携わってきた。また、大学では日本語教育を専門的に学びながら、茨城県の中学校で外国にルーツをもつ子どもたちへの日本語指導を行ったり、留学生などにも日本語を教えている。国際交流協会や市が主催する日本語教育支援者研修にも多数参加してきた。

◆私が解決したいグローバルな社会問題
…**言語の壁による労働安全格差**

外国人労働者が“**日本語の壁**”により
労働災害や危険にさらされていること

外国人労働者数
約230万人

■きっかけとなった出来事

私は高校生の頃から、ベトナムの技能実習生送り出し機関で渡日前日本語教育に携わり、大学進学後は全国各地の国際交流協会や市主催の日本語教室と協働して、技能実習生の渡日後教育にも携わりました。これまで活動を通して、延べ約100名の実習生と直接対話し、彼らの生の声を聞き続けてきました。

そこで実際に日本に来て働いている彼らから、こんな声を多く聞きました。

「簡単な日本語は分かるけど、**業務の日本語が難しすぎて理解できない**」

「**聞き返す勇気もないし、不安なまま作業を続けている**」

「合っているのか**分からないまま危険な作業をしている**、事故が怖い」

—**言語の壁**が「**命と安全**」に直結していることを実感した

■日本社会の現状

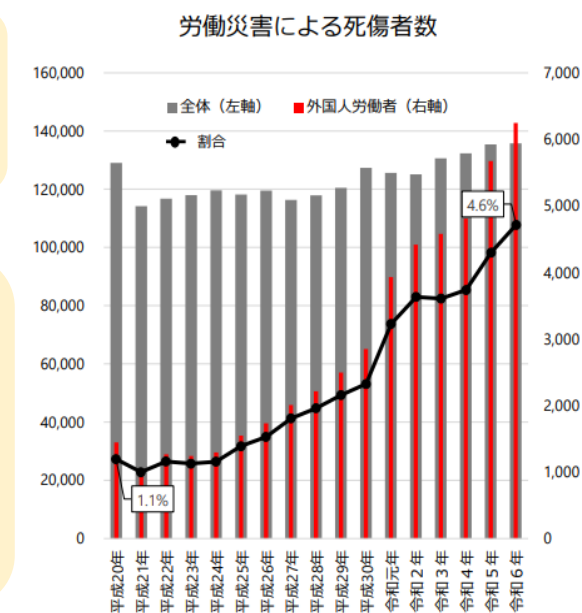
技能実習生などの外国人労働者は
製造業・建設業・農業など
危険性の高い現場で働くことも多い

外国人労働者の
死傷者数は増加

その**背景/現場**にある

難しい日本語

- ・業務説明/指示
- ・安全マニュアル
- ・安全(警告)標識



出典：厚生労働省労働基準局安全衛生部安全課「令和6年労働災害発生状況について」

少子高齢化が進む日本において外国人労働者は欠かせない存在になる。その中で彼らの安心と安全をどう守ればいいのか。

②その課題の解決に向けて、あなたが考えるアイデアやアプローチを教えてください。

あなたが関心を持つ“グローバルな社会課題”は？

その解決に向けて、どんなアクションを起こしますか？

特徴

- ・企業人を巻き込む → 現場に直結
- ・大学生が伴走 → 橋渡し・改善提案
- ・研修で終わらず → 実践→検証→改善の循環

「やさしい日本語で守る労働者の安全」～言葉の壁から命を守る仕組みづくり～

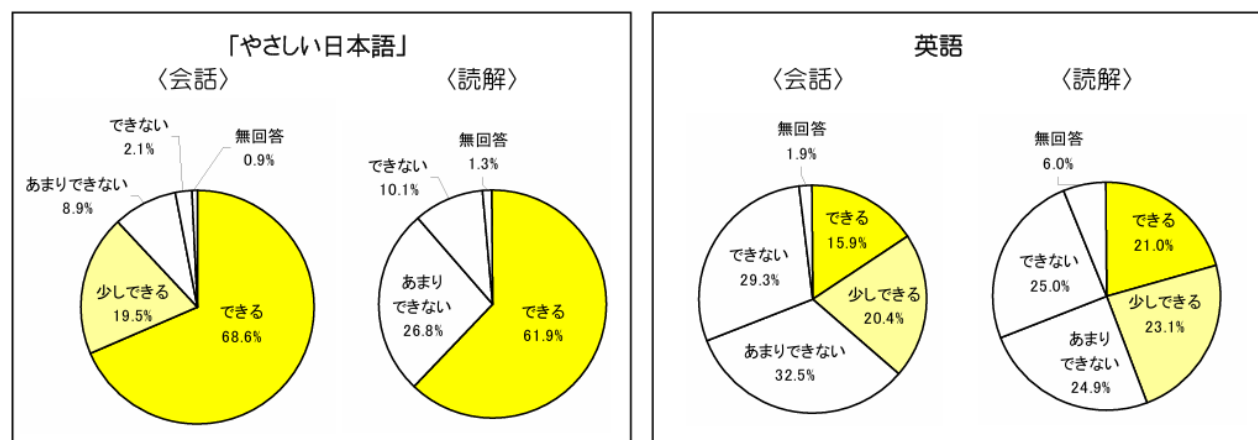
■「やさしい日本語」とは

普段話されている日本語を、外国人にも分かるように配慮した簡単な日本語のこと。しかし、単に簡単にすればよいのではなく、一文を短く、専門用語を避け、図や写真を使うなど、習得には体系的な学びと実践/研修が不可欠である。

■なぜ「やさしい日本語」？英語の方が通じるのでは？

→多くの人が勘違いをしている実態にある

【外国人県民の日本語と英語の能力】



(平成28年度静岡県多文化共生に関する基礎調査)

「やさしい日本語」は「英語」よりも有効な情報伝達手段になるということがわかっている

だからこそ「企業に浸透させる仕組み」が必要

しかし、現状の「やさしい日本語」研修は日本語教育関係者(日本語教師)が中心で、企業には届いていない

→本当に必要なのは企業が「やさしい日本語」を正しく知り、使えるようになること

「やさしい日本語」を現場で活かすには、学びと実践をつなぐ仕組みが必要である。そのために、企業と大学生が協働し、3週間で検証するプログラムを実施する。実際の現場で試し、改善を重ねることで“使える表現”を定着させていくのが狙い。

3週間＋現場検証「やさしい日本語 実践プログラム」

ステップ1：第1回研修（導入/対面）

- ・大学生がファシリテーターとなり、企業の社員に「やさしい日本語」を紹介
- ・実習生の声を交えた演習で体験的に学ぶ

ステップ2：現場実践（宿題 or 訪問）

- ・企業の社員が、職場で実際に使う「難しい指示」を収集
- ・近隣は学生チームが訪問、遠方は宿題形式で対応
- ・大学生がオンラインや対面でサポート

ステップ3：第2回研修（共有・改善/対面）

- ・収集した表現を複数の企業合同で「やさしい日本語」に直すワークを実施
- ・大学生が議論をリードしながら、変換を行い、改善前後を比較して「やさしにちチェッカー」で効果を確認

ステップ4：現場検証（アフターフォロー）

- ・改善した表現を実際に外国人労働者に使ってみる
- ・研修後、2週間にわたり毎日、外国人労働者にアンケートを実施→回収結果を分析して「効果の見える化」をする
- ・フィードバックを次の研修や資料に反映

③ そのアイデアを実現するとしたら、どんな準備やステップが必要になると思いますか？

あなたが関心を持つ“グローバルな社会課題”は？

その解決に向けて、どんなアクションを起こしますか？

【スケジュール計画と実現の仕方】

段階的な「やさしい日本語」普及プロセス

時間はかかるかもしれないが、段階的に取り組むことで外国人労働者に**確実に届く「やさしい日本語」普及体制**を構築できる。

そして、着実な積み重ねにより、外国人労働者の労働災害を減らし、企業の受け入れ体制を整える支援を実現していく。

【短期】第1段階：筑波大学×地域企業での実践

- ・筑波大学の日本語教育専攻の学生が中心となり、地域の自治体や国際交流協会、日本語教室と連携しながら告知を行う。
- ・学生は「やさしい日本語」に関する研究を進めており、その専門性を活かした研修会・ワークショップを企画する。
- ・茨城県内での外国人労働者を受けている企業を対象に、実践的なプログラムを試行する。

【中期】第2段階：関東甲信越ブロックへ活動を拡大

- ・このプログラム自体が、オンラインでも完結できるようにしているため、短期での活動をもとに、今度は「大学×企業のモデル」を関東甲信越ブロックに広げ、より体制・支援を行う。
- ・短期の実施で培ったノウハウや経験を基に、地域団体（市役所・国際交流協会・日本語教室）と連携して研修を展開する。
- ・「研究+実践」の成果を発表・共有することで、関東一円の国際交流協会や自治体で導入可能な形を整える。

【長期】第3段階：全国展開と体制構築

- ・筑波大学の実践モデルを全国の国際交流協会・自治体と共同で広める。
- ・学生は研究活動を通じて新しい「やさしい日本語」の指導・普及手法を開発・研究し、それを常に反映する。
- ・全国規模での普及体制を構築し、外国人住民の生活支援や社会参加の促進に資する仕組みを確立する。

主な担い手

・筑波大学の日本語教育を専門的に学び、研究している学生
必要なリソース

- ・3週間プログラムのカリキュラム
- ・研修モデルのマニュアル化
- ・全国規模のプラットフォーム

協働先

- ・茨城県内の国際交流協会・自治体・大学教授
- ・関東甲信越ブロックの国際交流協会・NPO
- ・全国の自治体・国際交流協会・民間企業

【予算計画】 総予算：0円

—それぞれの立場に「一方的に与える／受ける」ではなく、**繋がりが合って循環していく関係**

大学：授業・実習の場／研究データ／社会連携実績

企業：安全性と定着向上／現場に合う表現の型化

学生：実地研究・職務経験／地域貢献

外国人労働者：安心して働ける環境

→**自然に継続できる仕組み、費用なし**で持続可能。

☆大学/大学生の関与

・特に「やさしい日本語」を専門に学んでいる学生がファシリテーターとして参加。

→学生にとっては研究・実践の場となり、企業にとっては人的リソースを確保しやすくなる。

= **研究と実践**が結びつくことで、大学・企業・地域社会に**新しい循環**が生まれる。

外国人労働者に行う研修後アンケート

今は仮の状態だが、なにをもって研修後の企業の成長/変化を判断するのは今後とも検討しなければならない



あなたが関心を持つ“グローバルな社会課題”は？

その解決に向けて、どんなアクションを起こしますか？

※当てはまる方に☑をいれよう！

8 働きがいも
経済成長も



10 人や国の不平等
をなくそう



④ そのアイデアの実現に向かって今のあなたが踏み出せそうな一歩（アクション）はありますか？

☑すでに取り組んでいることがある：できるだけ具体的に教えてください。

☑まだ実行していない：「これなら始められそう」と思う最初の一歩があれば書いてみてください。

・また、そのアクションを始めるうえで、あるいはさらに広げていくうえで、自分にとってどんな支援や環境があると助かるかも教えてください。

■すでに取り組んでいること

① 自分自身が市や国際交流協会が主催する「やさしい日本語研修会」に参加する

市や国際交流協会が主催する「やさしい日本語研修会」に参加することで、やさしい日本語の知識はすでにありながらも、毎回新しい気づきが多く得ることができた。そして、複数回参加することで、現状の「やさしい日本語」研修は日本語教育関係者（日本語教師）が中心で、**企業には届いていないということがわかった**。この事実気づいたからこそ、企業の外国人受け入れ担当者にも「やさしい日本語」を普及させる必要性を強く感じるようになった機会となった。



② 日本語教室での実践活動

実際の日本語教室で学習者に授業中にヒアリングを行い、その場でやさしい日本語への変換支援を実施している。学習者は分からないことを説明できないことが多いため、こちらから「高所注意」「頭上注意」などの職場でよく見る安全表示を提示して、理解度を確認している。わからない言葉は、「やさしい日本語」に変換して説明し、本当に理解できたかを確認することで、学習者の安全確保と理解促進の両方を図っている。(→非常に学習者に好評)

頭上注意

足もと
注意

火気厳禁

→あたまにきをつけて →下(あし)をみて →ここで火はつかわない

■これから実行したいこと 最初の一步：大学と企業をつなぐ職場見学プログラムの実施

調査として、教えている学習者の職場を実際に見学する。企業には、外国人の受け入れの実態や、安全表示や文書も見せてもらい確認をする。いきなり企業に訪問するのは難しいが、実際には日本語ボランティアとして学習者の指導をサポートしている人の中に、すでに企業の担当者の方がいて現時点で関係がある。まずはそうした人たちに協力してもらいながら、職場見学の実現に向けて進めていく。自分で企業を訪問し、**現場の状況を自分の目で確かめ、その上で学んだことを今後の3週間プログラムの実施に活かしていく**。

☆課題：継続的な企業との関係構築のためのネットワーク作りのためにも、プログラムについて**専門的な助言**が必要
やさしい日本語を専門とする筑波大学の教授と共同研究という形で取り組みを進めることで、企業への信頼性を高め、より効果的なプログラム開発と継続的な関係構築を目指したい。